アジアの寺院で聞く南無阿弥陀仏

吉田一彦

ここ十数年ほど、中国の寺院、石窟、仏塔などを調査で訪ねることが少なくない。中国ばかりではない。韓国、ベトナム、台湾、そしてインドの寺院、史跡、博物館を訪ね、その姿を目と耳に焼き付けてきた。その主たる目的は神仏融合の国際比較調査である。仏法と神信仰の複合、融合は、日本では「神仏習合」と呼ばれ、日本に特徴的に見られる宗教現象だと説かれることがあるが、そうではない。アジアの仏教国・地域には、広く神仏の複合、融合が見られる。それらを比較して、その共通性と差異を明らかにすることを自分の研究の大きな目標にしている。そこから析出される共通性は、世界宗教である仏法を貫く、仏法の特質になるだろう。差異はその国・地域の宗教の個性、文化の特質になるだろう。相互の文化交流の様相を明らかにすることも重要である。そう考えて、いくつかの国や地域の寺院、道観、孔子廟、神を祀る廟や祠、あるいはヒンドゥー教寺院などを拝観し、石窟の仏像、仏画、老子像、孔子像、神像、題記、石碑などを熟覧し、博物館で関係史料を実見している。

私は、現地で接するそれらの姿に毎回のように感激し、そうだったのかと驚き、これは何なのだろうと課題を得ることができた。たくさんの写真を撮影し、帰国後も反芻するようにその姿を確認し、一緒に見学した研究仲間と研究会で意見交換してきた。歩いて学ぶ歴史の旅である。

いつからそうした関心を持ち始めたのか。あらためて記憶をたどってみると、一九九一年九月のある旅行のことが思い出される。父が六五歳になって仕事からリタイアすることになり、その記念に香港に家族で旅行に行くことになった。それは長年働いてきた父を慰労するための観光旅行だった。けれど、私は、家族が買い物をしている間、少しだけ別行動をして近くにある道観を見学に行った。赤松黄仙祠（黄大仙祠）である。生まれて初めての道観の拝観だったので胸が高鳴った。ビルの谷間にある道観に入ると、正面に本殿があり、「赤松黄仙祠」と書かれている。殿内には黄大仙という神仙が祀られているという。多数の参拝者による賑わい、絶え間なく立ち昇る線香の煙、そして五体投地する老若男女の篤い信仰の姿に、私は圧倒された。さらに驚いたのは、隣にある「三聖堂」という堂舎だった。堂内を拝見すると、観音菩薩、

関帝、呂祖（呂洞賓）の三聖が祀られていた。この祠内には孔子も祀られており、ここは道教の黄大仙、仏教の観音菩薩、儒教の孔子をはじめ道仏儒三教の尊格を合わせ祀る宗教施設になっていた。その融合と混沌の姿に私は大きな衝撃を受けた。

それから時間が経過し、二〇〇〇年代になると、私は意識して中国の寺院を訪れるようになっていた。天台山、五臺山、泰山などの神仏の山。炳霊寺、麦積山、敦煌、雲崗、天龍山、龍門、大足、安岳、牛角寨などの石窟。仏光寺、鎮国寺、奉国寺などの寺院。応県木塔、朝陽北塔、慶州白塔などの仏塔などである。そのそれぞれで有意義な知見を得ることができた。中でも四川省の石窟寺院では、唐代～宋代の道仏の融合、儒仏道三教の融合の状況が判明する興味深い事例に出会うことができた。

日本の神仏融合をアジアの歴史と文化の中で考えることは、私にとって大きな課題である。研究はまだ始まったばかりで、わからないこと、整理がつかないことが少なくないが、最近、これまでの研究の一部をまとめ、発表することができた（「奈良・平安時代の神仏融合」（伊藤聡・吉田一彦編『日本宗教史三　宗教の融合と分離・衝突』吉川弘文館、二〇二〇年）。吉田一彦編『神仏融合の東アジア史』名古屋大学出版会、二〇二一年）。これを足掛かりに、文化交流史の視座から日本の宗教の歴史を考えていきたい。

調査の日の朝は早い。特に移動距離が長い日は早くに出発し、一日の行程が終わってホテルに辿り着くと夜になってしまう。そろそろ帰途につく時間だと思っても、少しでも長く目的地に滞在したい。そんな思いで日が暮れはじめるまでお寺にいると、僧たちの読経の声が聞こえてくることがある。あるいは、「南無阿弥陀仏」のお念仏の声が聞こえてくることがある。僧が行道しながら念仏を称える場面に出会ったこともある。

「南無阿弥陀仏」の称名の声が聞こえてくると、日本語と中国語で少し音は異なるが、仏法の共通性を強く感じる。中国でも地域によって発音に違いがあるのかもしれないが、日本人の私には「なもあみとふぉ」のように聞こえる。ベトナムでも「南無阿弥陀仏」の声に接したことがある。「なもあじだふぁ」と聞こえる。その声は「南無阿弥陀仏」のベトナム語の発音である。韓国でももちろん「南無阿弥陀仏」の念仏が称えられている。

日本で「南無阿弥陀仏」の念仏というと、法然や親鸞の仏法がよく知られている。平安時代末期～鎌倉時代、日本では「南無阿弥陀仏」の念仏を称える念仏聖たちが多く活躍し、その中から法然や親鸞が現れた。その源流はどこに求められるか。後世につながるような日本の念仏は、円仁によって九世紀中期に唐から日本にもたらされたもので、円仁は五臺山の法照という僧が実践していた歌う念仏である「五会念仏」を将来した（薗田香融『平安仏教の研究』法蔵館、一九八一年）、比叡山では、また十世紀末期～十一世紀初頭に源信によって浄土教が興隆された。では、その次の段階はどのように進展するのだろうか。

ここで大切なのは、「南無阿弥陀仏」の念仏は日本でのみ発達した仏法ではないということである。中国では、宋代になると

禅・教・律と念仏を中心とする仏法が興隆し、このうち「教」では天台、華厳、慈恩の三宗が隆盛した。平安時代末期～鎌倉時代、宋の新しい仏法が日本に波状的に流入し、大きな影響をおよぼした。そこで栄西、俊芿、重源などの入宋僧が果たした役割は大きかった。禅、天台、華厳、慈恩、律、念仏をめぐる新しい動向は、日本の仏法でも進展した。宋の禅・教・律・念仏は、日本のみならず、中国周辺地域に広く伝播し、大きな影響をおよぼした。とりわけ、禅と念仏は大いに隆盛し、今日に至るまで各地域で伝存されてきた。アジア東部の国や地域に流布した「南無阿弥陀仏」の称名は、そうした歴史を背負っている。平安鎌倉時代の日本における禅や念仏の展開は、この時代にアジア東部で進展した仏法の動向の中で理解し、位置づける必要がある。

このたび、四人の企画編集委員の編によって『日本宗教史』全六巻を刊行した。世界の中で日本の宗教はどのような位置にあるのか。日本における宗教の融合や衝突をどう理解するか。日本の信心の姿にはどのような特色が見られるか。文化交流史の視座から日本の宗教をとらえ直すとどのような姿が見えるのか。そして、人文学諸分野の横断・組み替えによって日本宗教史を捉え直すことは可能か。可能だとするならどう構想するか。中国や韓国やベトナムの寺院で「南無阿弥陀仏」の声を聞きながら、私は日本宗教史を問い直すにはどうすればいいのかについて考えた。

（よしだ　かずひこ・日本古代史）

日本宗教史 全6巻
伊藤　聡・上島　享・佐藤文子・吉田一彦編
A5判・本文平均三二〇頁
各三八〇〇円（税別）

質と量ともに厚みを増した陰陽道研究の到達点を示し、陰陽道の通史を展望する新シリーズ。

新陰陽道叢書（全五巻）

編集委員　林淳／細井浩志／赤澤春彦
梅田千尋／小池淳一

第二巻 中世
好評発売中！
A5判 592頁 9,000円

以後2か月ごと刊行
各巻予価 9,000円
（価格税別）

第一巻 古代
（既刊　9,000円）
第三巻 近世
第四巻 民俗・説話
第五巻 特論

詳細は特設ページをご覧ください

名著出版